〔巻頭言〕

看護学教育と看護実践活動に貢献する紀要を目指して

理事長　小西　美智子

岐阜県立看護大学紀要は、開学の2000年度に第1巻を発刊し、10年目の2010年度に本第11巻を刊行することができました。大学は学部の完成年度を迎えると共に、大学院研究科を設置し、修士課程および博士課程を開講し、看護学の高等教育研究機関として発展してきました。そして今年（2010年）4月には、公立大学法人岐阜県立看護大学として出発し、岐阜県内の看護の質向上に貢献する活動が求められています。

紀要は、大学・研究所などがその組織の理念に沿って、その成果を研究論文として社会に向けて発信する定期刊行物ですから、従来から本学教員の教育活動及び研究活動を掲載しています。法人化初年度にあたり、改めて本学の紀要のあり方を考え、内容の充実に努力していきたいと思います。

大学は設置目的に沿って、教育理念と教育目標を作成し、それに基づいて教育カリキュラムを構築し、卒業時の到達目標を設定しています。本学は看護大学であることから学生の卒業時到達目標は看護師、保健師、助産師、養護教諭として社会で活躍するために必要な看護実践能力を教授することによって達成できます。そのため教員は教育カリキュラムに基づいて看護実践能力が育成できる教育方法を討議し、考案し、実践し、さらに教員の自己評価、受講した学生の授業評価や卒業生の活動評価を取り入れて、教育方法の改善・工夫・改革に取り組み、新しい教授法（Pedagogy）の知見を得ることが求められています。この一連の教授法開発において得られた思考過程を、科学的根拠に基づいて論理的に説明し、紀要に掲載するのが教員としての役割であると考えます。その成果は、教員が自分の教育方法を自己点検・評価し成長するために、また同じカリキュラムで授業を展開している他の領域の教員と教授法を討議・連携・共有する素材となり、大学全体の教授法の改革・改善に繋げるためです。そして各大学の紀要へのこのような看護教育活動に関する論文の積み重ねが看護学教育全体の進展に貢献すると考えます。

本学は開学以来、教員が岐阜県の現職看護職者と協働で、看護実践現場の看護課題に研究的に取り組む共同研究事業が活発に行われています。そして本学大学院修了生も共同研究のメンバーになり、毎年報告会を開催し、報告書も作成され、さらに学会発表も多いのですが、研究論文としての公表が少ない状況が続いています。共同研究に取り組む過程は、教員と看護職が看護実践現場の看護課題を科学的に分析し共有し、改革・改善への方針を打ち出し、研究的に取り組む方法を見出し、試行錯誤しながら実践し、その結果を根拠に基づいて科学的に整理し評価する過程を経て、初めて報告ができると思います。この共同研究の成果として、看護実践現場の改善・改革が推進されたり、看護ケアサービス内容に良い変化が得られた場合は、研究論文として公表することは誰もが行うと思います。しかし、想定していたように成果が得られなかった場合にも、研究推進過程を研究論文として公表することは必要で、負の成果もまた研究成果であるといわれています。期待した成果が得られなかった場合、研究を担当した者が一緒に研究推進過程を振り返り、問題事項を明らかにし、その内容を真摯に受け止め、次の研究に活用する方法や工夫する方法を整理し提示し、この過程を公表することも必要と考えます。この公表された論文は同じような看護実践課題に研究的に取り組む者に多くの示唆を与えると思います。このような看護実践研究成果の利用を看護職者間で積み重ねることによって、看護実践活動の発展に寄与すると考えます。

教員は紀要に共同研究の過程を含めた成果を、研究論文として作成する作業を現職看護職者と協働で行い、自分の研究能力育成とともに、看護実践研究のできる現場の看護職人材育成に貢献することを期待しています。